

知識の質を高める指導法の開発

— 小学校音楽科第5学年「音（旋律）の重なりを感じ取ろう」 —

Development of Teaching Methods to Improve the Quality of Knowledge
: 5th Grade Class, "Let's Feel the Overlapping of Sounds (Melody)"
by Music Department of Elementary School

納 見 梢*

NOMI Kozue

【概要】本研究では、知識には「情動的側面」、「操作的側面」、「感覚的側面」の3つの側面があると捉え、それらの結び付きが強化された状態を「知識の質」が高まっていると定義付けている。実践の結果、体験と価値付けの活動サイクルを用いることで、音楽を多面的・多角的に見つめる力を身に付けることができた。検証した歌唱、器楽及び鑑賞のいずれの楽曲に対しても捉え方に変容が見られた。また、価値観を引き出す問いを投げかけることで、音楽に対して自分なりの価値付けをすることができた。特に題材前の問いは題材を貫く思考の動機となり、3つの側面からのアプローチによって、終末には児童自身がより納得感をもって価値を見いだしていく様子が見られた。

【キーワード】小学校音楽科、知識、価値付け、音の重なり

1. 研究の目的とその背景

1-1 研究の目的

本研究の目的は、知識に焦点を当て、その質の高まりを目指す指導法を開発するものである。本研究における「知識の質を高め」ている状態とは、2-1で示す「情動的側面」、「操作的側面」、「感覚的側面」の3つの側面の結び付きを強化している状態を指す。

知識の習得については、従来、音楽の特徴を聴き取りたり感覚的に感じ取ったりし、それらをつなぐことへの試みが行われてきた。本研究では、知識を3つの側面から捉え直し、児童自身が音楽を多面的・多角的に見つめたり、音楽に対して自分なりの価値付けをしたりすることを視点として、知識の質を高めるための指導法を明らかにしていきたい。

1-2 小学校学習指導要領との関連

文部科学省（2017a）による平成29年の学習指導要領改訂において、音楽科では、知識に関する項目が新たに設けられた。小学校学習指導要領解説総則編（平成29年7月）文部科学省（2017b）においては、「芸術系教科における知識は、一人一人が感性などを働かせて様々なことを感じ取りながら考え、自分なりに理解し、表現したり鑑賞したりする喜びにつながる（以下略）」と記されており、知識を多面的・多角的に、かつ自分なりの視点で捉えることが求められていることが分かる。また、小学校学習指導要領解説音楽編（平成29年

7月）文部科学省（2017c）においても、「このような知識は、表現や鑑賞の活動を通して、実感を伴いながら理解されるようにしなければならない。」と記されており、その指導方法や評価方法についての関心が高まっている。本研究における知識は、以上の内容に通ずるものである。

1-3 これまでの研究成果と課題

これまで、『汎用的知識』を身に付ける指導の工夫」という研究主題の下、「汎用的知識」を「後の学習や他の題材でも生きて働く知識」として定義付け、知識の習得の仕方に着目して実践を重ねた。具体的には、教師から与えられた知識を情報として捉えるだけでなく、実際の活動の中で児童自身が音楽的な見方・考え方を働かせ、知識を見いだしたり確かめたりするように授業を展開した。その際の手立てと成果については以下の通りである。

(1) 児童の疑問や思いから学習課題を設定し、学習の目的を共有することにより、振り返り場面において学びや思考を自覚する姿を見いだすことができた。

(2) 音楽を形づくっている要素の表れ方を比較する場面を設定することにより、音楽を形づくっている要素を共通言語として用いる姿を見いだすことができた。

* 埼玉大学教育学部附属小学校

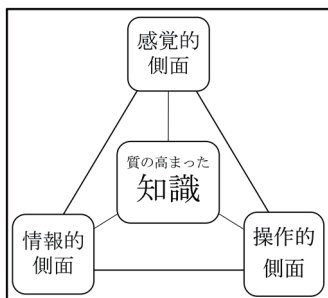
つまり、「実感を伴いながら理解されるよう」な授業展開をすることで、児童が「後の学習や他の題材でも生きて働く知識」を得られることが明らかになった。一方で、知識の見方が限定的であったり、知識を自分なりに捉えたりすることが乏しい実態が見られた。このことから、「一人一人が感性などを働かせて様々なことを感じ取りながら考え、自分なりに理解」することへのアプローチに課題があると考えた。

2. 研究の概要

2-1 研究の理論的枠組み

本研究では、知識には以下の3つの側面があると捉える。「知識の質が高まった状態」とは、3つの側面の結び付きが強化された状態を指す(図1)。

情動的側面	・主に、音楽を形づくっている要素の意味理解を指し、不変的な側面。
操作的側面	・歌唱における声の出し方、器楽イ(イ)に関連する奏法技能習得、向上のための側面。
感覚的側面	・感性などを働かせて感じ取り、自分なりに捉える側面。そのため、個々の感じ方や考え方などに応じて習得され、新たな学習過程を通して更新される側面。



【図1 「知識の質の高まり」】

学習内容や学習状況によっては、1つの側面だけを高めたり、2つの側面を結び付けたりすることを意図して行っていく必要がある。しかしながら、児童の中で3つの側面が伴ってこそ、音楽へのより深い理解が得られ、知識の質が高まっていくと考えている。

2-2 研究の仮説と手立て

研究主題に迫るため、次の仮説と手立てを立てた。

<仮説1>

児童が音楽を多面的・多角的に見つめれば、知識の質が高まるだろう。

<手立て1>

児童が音楽を多面的・多角的に見つめるために、活動と価値付けのサイクルを設ける。具体的には、①「音楽を聴く」→②「見つめる・考える」→③「対話する」→④「表現するAB」を設定する(「表現するA」は音楽表現、「表現するB」は言語的表現を指す)。

<仮説2>

児童が音楽に対して自分なりの価値付けをすれば、知識の質が高まるだろう。

<手立て2>

児童が音楽に対して自分なりの価値付けをするために、価値観を引き出す問いを投げかける。

<仮説1>について、音楽を繰り返し多面的・多角的に見つめ、音楽との豊かな関わりを経験することで、3つの側面の結び付きが強化される状態を生み出せると考えた。

<仮説2>について、特に感覚的側面へアプローチすべく、音楽を自分なりに捉えたり価値付けたりすることで、それらが<仮説1>のサイクルに影響を与え、より質の高い知識を習得することができると考えた。

3. 研究の方法

3-1 対象と実施期間

埼玉県内にあるS小学校第5学年の児童35名(男児18名、女児17名)を対象とし、2021年(令和3年)5月下旬から6月中旬までに実践をした。

3-2 教材

教育芸術社「小学生の音楽5」より、主に以下の教材を採用した。

○歌唱教材「いつでもあの海は」

(佐田和夫 作詞/長谷部匡俊 作曲)

○器楽教材「小さな約束」(佐井孝彰 作曲)

○鑑賞教材「アイネクライネナハトムジーク第1楽章」

(モーツァルト 作曲)

3-3 検証方法

(1) 学習カード記述分析・技能聴取

活動と価値付けのサイクルを通して、音楽を多面的・多角的に見つめていたかについて、教材ごとに記入した学習カードの記述分析及びそれに伴う技能聴取から検証した。

(2) 振り返りカード記述分析・アンケート分析

価値観を引き出す問いにより、児童が自分なりの価値付けをしていたかについて、題材前後の振り返りカードの記述及びアンケート分析から検証した。

4. 研究の実際

図2には、主に題材の目標、評価規準、図3には、題材の指導と評価の実際を示している。

知識の質を高める指導法の開発

題材名	音（旋律）の重なりを感じ取る		
題材の目標	○聴き取ったことと聞き取ったこととの関わりについて考え、「いつでもあの海は」の特徴を捉えた表現を工夫し、どのように歌うかについて思いや意図をもち、「アイネクライネナハトムジーク第1楽章」等の曲想と音楽の構造との関わりについて理解するとともに、思いや意図に合った表現をするために必要な技能を身に付けることを通して、音の重なりに親しむ。		
主な音楽を形づくっている要素	音色、旋律、音の重なり、音楽の縦と横との関係		
題材の評価規準	知識及び技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
	① 知技 曲想と音楽の構造や歌詞の内容との関わりについて理解するとともに、各声部の歌声や全体の響き、伴奏を聴いて、声を合わせて歌う技能を身に付けている。(歌唱) ② 知 曲想及びその変化と、音楽の構造との関わりについて理解している。(鑑賞)	思① 歌唱表現についての知識や技能を得たり生かしたりしながら、曲の特徴にふさわしい表現を工夫しどのように歌うかについて思いや意図をもっている。(歌唱) 思② 鑑賞についての知識を得たり生かしたりしながら、曲や演奏のよさなどを見だし、曲全体を味わって聴いている。(鑑賞)	態① 音の重なり、音楽の縦と横との関係に興味をもち、音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に歌唱、器楽及び鑑賞の学習活動に取り組もうとしている。(歌唱、器楽、鑑賞)

【図2 題材の目標、評価規準】

時	○学習内容 ○教材	・指導上の留意点	評価	分析データ収集
第1次 音（旋律）が重なり合う響きを感じ取りながら、歌ったり演奏したりしよう				
1 2	○旋律や強弱、歌詞の内容に気を付けて歌い、曲の山を見付ける。 ○音（旋律）の重なり方の違いを視点に範唱を聴き、それによって得られる効果について考える。 ◎「いつでもあの海は」	・主旋律に旋律線を書き、音の高さから曲の山を考え、強弱や歌詞の内容を裏付けるようにする。 ・楽譜や音源から副次的な旋律の重なり方の違いを確認し、印象の変化について考えるようにする。	思① 《記述》	振り返りカード 学習カード
3 4	○楽譜や範奏を基に、曲想を感じ取り、ユニゾンの部分やブレス位置の違いを見付ける。 ○旋律やブレス位置、パートの役割に気を付けて演奏する。 ◎「いつでもあの海は」（常時活動） ◎「小さな約束」（本活動）	・楽譜や範奏を基に、ユニゾンの部分やブレス位置の違いを見付けることで、曲想の変化や曲の山との関連を見いだせるようにする。 ・他方の旋律やフレーズを意識しながら、運指に気を付けてリコーダーで演奏できるようにする。	① 知技 《記述・聴取》	学習カード
第2次 弦楽器の音色を知り、音（旋律）が重なり合う響きを味わって聴こう				
5	○弦楽器の音色の特徴を知る。 ○楽曲全体を通して聴き、主題の部分から楽曲を4つに分ける。 ◎「アイネクライネナハトムジーク第1楽章」	・視覚的資料を用いて、弦楽器の音色の特徴に気付くようにする。 ・主題（ユニゾン）が何度出てくるか確かめながら楽曲全体を聴き、構成を捉えるようにする。	態① 《様子・記述》	
6 7	○音（旋律）の重なりに着目して聴き、それぞれの重なり方の違いやそのよさについて、曲中での効果や自分なりの価値を見いだす。 ◎「アイネクライネナハトムジーク第1楽章」	・音の重なり方を図形譜で提示し、主題以降の構成を捉えるようにする。 ・音の重なり方の違いによってもたらされる効果と、それに対して自分がどう感じるかを起点に、友達と意見を交わしながら学習カードに記述するようにする。	② 知 《発言・記述》 思② 《記述》	学習カード 振り返りカード アンケート

【図3 題材の指導と評価の実際】

5. 結果と考察

5-1 学習カード・技能からみる〈仮説1〉
—活動と価値付けのサイクル

〈仮説1〉
児童が音楽を多面的・多角的に見つめれば、知識の質が高まるだろう。

各教材に取り組む際に、活動と価値付けのサイクルを設定した。それに沿って、抽出児童A児を中心として、記述分析及び技能聴取から検証を進める。

—歌唱の実践について

第1・2時「いつでもあの海は」の実践におけるサイクルと授業展開の詳細、主に取り扱う知識の側面は以下の通りである。

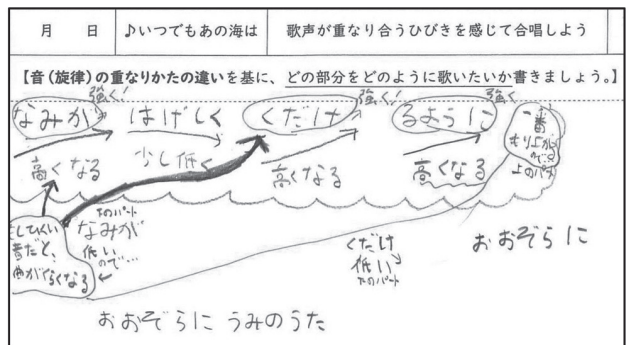
	・授業展開の詳細	知識		
		情	操	感
① 聴く	・範唱を聴き、曲想を捉えたり歌詞の情景を思い浮かべたりする。			○
② 見つめる・考える	・「斉唱」→「対位的な重なり」→「和声的な重なり」という曲の構成を楽譜や音源で確認する。 ・教師が課題を提示する。 「作曲者は、なぜ重ね方を変えているのだろうか。」	○		
	・主旋律の動きを確かめて歌唱したり、歌詞の内容について理解を深めたりする。 ・手で空中に旋律線を描いたり、パートごとにリズムや音高の違い、ブレス位置を確認したりしながら、副次的な旋律の動きを確かめて歌唱する。	○	○	
③ 対話する	・教師と児童の対話を中心に、「斉唱」と「重なり」の味わいの違いやその価値を見いだす。 ・児童同士の対話を中心に、歌詞と関連させながら、音（旋律）の重なり方の違いによる味わいの違いやその価値を見いだす。	○	○	○
④ 表現する	・曲の構成を基に、他方の旋律との音（旋律）の重なりを味わいながら、強弱に気を付けて、歌唱したり合唱したりする（A音楽表現）。		○	○
	・課題に対する自分なりの答えをもち、「音（旋律）の重なり方の違いを基に、どの部分をどのように歌いたいか。」という思考力に結び付けて、本教材での学びを記述する（B言語的表現）。	○		○

「③対話する」では、具体的に以下の発言が見られた（破線部は、他者へ派生した発言）。

- C1 「斉唱の部分はmfで、題名『いつでもあの海は』が冒頭に出てきて、『ぼく』が思っている海の姿が説明的に描かれている。」
- C2 「その一方で、旋律が重なるところからfになるのは、海を思う気持ちが高まっているということなのかもしれない。」
- C3 「『なみが〜』『なみが〜』の部分は、次々と波が襲ってくる感じがする。」
- C4 「C3の言う部分の下のパートは低い音だから、波が押し寄せてくる感じがより伝わる。」
- C5 「最後の段で重なり方が変わるの、二つの波が合わさって、気持ちと重なっていくからではないかな。」
- C6 「最後にmpになるのは、『とおくひびくよ』とか『かぜもひかるよ』とか、余韻を残すためだと思うんだけどどうだろう。」

授業後の抽出児童A児の記述は、図4のようになっている。「対位的な重なり」の部分を取り上げ、主旋律と副次的な旋律の音高の違いを基に、曲の山につながるように歌いたいという思いや意図に結び付けて記述している。

歌唱における知識の指導事項「曲想と音楽の構造や歌詞の内容との関わりについて理解すること」に照らすと、抽出児童A児はB評価となる。曲想については、「暗い」、「一番盛り上がる」の記述と音楽の構造（ここでは旋律、楽曲の構成）との関わりについての理解が見いだせるためである。一方で、副次的な旋律及び歌詞に関しては、「③対話する」の段階における授業内の発言もなく、記述もなかったため、B評価にとどまると考えた。



【図4 抽出児童A児の学習カード①】

学級全体を見ると、100%の児童が抽出児童A児と同様に、重なり方の違いによって曲想が変化する部分について記述することができた。さらに、歌詞と関連付けて記述したA評価の児童は57.1%であった。技能聴取によると、74.2%の児童が曲の山に合わせて強弱を付けて歌唱することができた。

以上のことから、歌唱の実践における活動と価値付けのサイクルの有効性が見いだせた。

「①聴く」段階で、起点となる知識の感覚的側面が表出し、それ以降の活動に引き継がれていく。「②見つめる・考える」段階では、強弱や音楽の縦と横との関係、歌詞など、楽譜から読み取れる知識の情動的側面を整理しながら、操作的側面と関連付けている。さらに、「③対話する」段階で自分なりに捉えた気づきを共有することを通して、「④表現する」段階における知識の総括へと発展させている。

このように、活動と価値付けのサイクルを基に、児童が音楽を多面的・多角的に見つめることで、歌唱の実践において知識の質を高めることができたと考えた。

―器楽の実践について

第3・4時の「小さな約束」の実践におけるサイクルと授業展開の詳細、主に扱う知識の側面は以下の通りである。

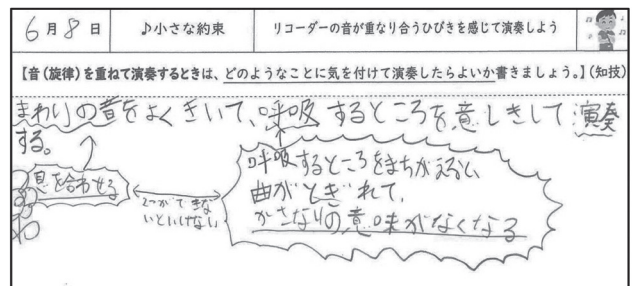
	・授業展開の詳細	知識		
		情	操	感
① 聴く	・曲想を味わって範奏を聴き、曲の構成を考える。			○
② 見つめる ・考える	・「ユニゾン」→「音（旋律）の重なり」という曲の構成を楽譜や音源で確認する。 ・児童の発言や疑問を起点に課題を設定し、全体で共有する。「ユニゾンと重なりでは、器楽表現をどのように変化させたらよいだろうか。」	○		
	・それぞれのパート譜を用意し、運指や奏法に気を付けてリコーダーで演奏する。		○	
③ 対話する	・教師と児童の対話を中心に、「ユニゾン」→「音（旋律）の重なり」の味わいの違いやその価値を見いだす。 ・各パートの役割や曲の山との関連について考えを出し合う。	○	○	○
④ 表現する	・曲の構成を基に、他方の旋律との音（旋律）の重なりを味わいながら、ブレスに気を付けて演奏する（A音楽表現）。		○	○
	・課題に対する自分なりの答えをもち、「どのようなことに気を付けて演奏したらよいか。」について、技能と関連付けながら本教材での学びを記述する（B言語的表現）。	○	○	○

「③対話する」では、具体的に以下の発言が見られた（破線部は、他者へ派生した発言）。

- C1 「最初がユニゾンなのは、ユニゾンが曲の始まりの感じを出しているからではないか。」
- C2 「曲の後半を見ると、下のパートが低い音で支えていることが分かる。」
- C3 (抽出児童A児)
「ブレス位置がズれるから、曲（フレーズ）が途切れないようになっている。」
- C4 「この曲の一番高い音のファの前（12～13小節の一部）にユニゾンが出てくることで、その後の曲の山が強調されている。」
- C5 「曲の山の後にまたパートが分かれている。これがまた新たな曲想を生み出しているように感じられる原因かもしれない。」

授業後の抽出児童A児の記述は、図5のようになっている。ユニゾンの部分では息をよく合わせること、音（旋律）の重なるの部分では特にブレス位置に気を付けて周囲の音をよく聴いて演奏する大切さについてまとめている。その後のリコーダーの技能聴取においては、器楽における知識の指導事項「(ウ) 各声部の楽器の音や全体の響き、伴奏を聴いて、音を合わせて演奏する技能」が十分に達成されていることが見いだせた（ただし、本題材における評価対象とはしていない）。

器楽における知識の指導事項「(ア) 曲想と音楽の構造との関わりについて理解すること」に照らすと、抽出児童A児はB評価となる。曲想については明記していないものの「かさなりの意味」についての記述があり、これは、曲想やフレーズ感を感じ取っているものと推察されるからである。「③対話する」の段階で授業内の発言もあったが、ここでも曲想に関する具体的な内容は見られなかったため、B評価にとどまると考えた。



【図5 抽出児童A児の学習カード②】

学級全体を見ると、88.6%の児童が抽出児童A児と同様に、ブレス位置や音（旋律）の重なりがもたらすフレーズに関する記述をすることができた(1人欠席)。さらに、曲想に関する具体的な記述したA評価の児童は37.1%だった。リコーダーの技能聴取によると、64.7%の児童が正しいブレス位置で演奏することができた。

以上のことから、器楽の実践における活動と価値付けのサイクルの有効性が見いだせた。

歌唱と同様、「①聴く」段階で、起点となる知識の感情的側面が表出する。「②見つめる・考える」段階では、音楽の縦と横との関係やフレーズなど、楽譜から読み取れる情動的側面を整理しながら、操作的側面と関連付けていく。初めは正しい運指で演奏することに精一杯でありながらも、「③対話する」段階で自分なりに捉えた気づきを共有することを通して、「④表現する」段階において、リコーダーにおけるブレス箇所やフレーズ感などの操作的側面を中心に、それぞれの側面から楽曲に迫っている。

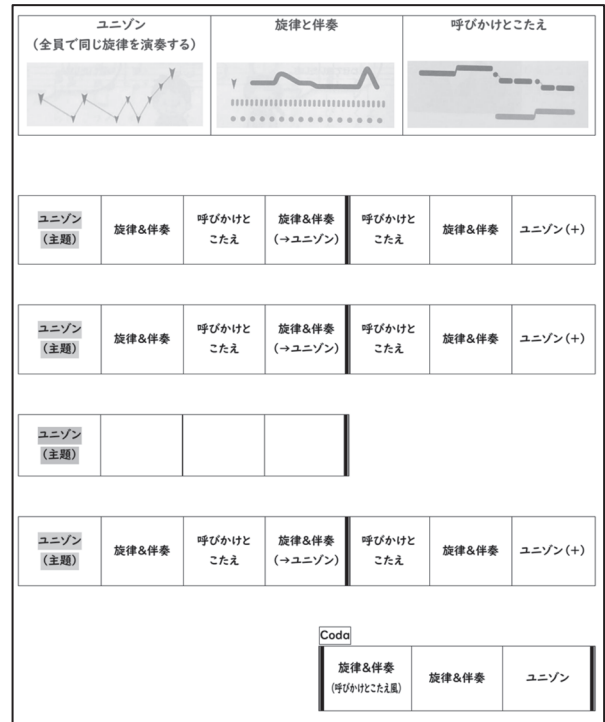
このように、活動と価値付けのサイクルを基に、音楽を多面的・多角的に見つめることで、器楽の実践においても知識の質を高めることができたと考察した。

—鑑賞の実践について

第5～7時の「アイネクライネナハトムジーク第1楽章」の実践におけるサイクルと授業展開の詳細、主に取り扱う知識の側面は以下の通りである。

なお、鑑賞における技能の指導事項は設定されていないため、知識の操作的側面、「④表現する（A音楽表現）」については記述をしていない。

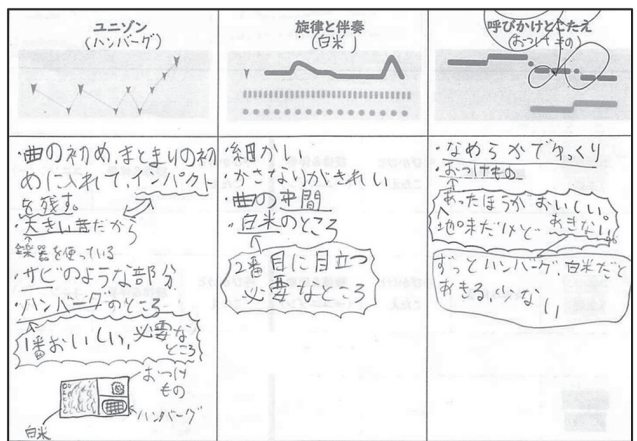
	・授業展開の詳細	知識		
		情	操	感
① 聴く	・弦楽器の音色を知る。 ・主題に着目し、曲想を味わって曲全体を聴く。	○	/	○
② 見つめる・考える	・主題を起点に、4つのパート+coda. に分けて楽曲の構成を捉える(図6)。 ・4つのパート+coda. の各部分における音(旋律)重なり方の違いを聴き取り、楽曲の構成をより細かく整理する。 ・児童の発言や疑問を起点に課題を設定し、全体で共有する。「それぞれの音(旋律)の重なりは、曲中でどのような役割を果たしているのだろうか。」	○	/	/
③ 対話する	・「それぞれの重なり方には、どんな特徴があるか。」また、それに対して「自分はどのように感じるか。」という視点で思考し、記述したものを基に友達と意見交換する。	○	/	○
④ 表現する	・課題に対する自分なりの答えをもち、それぞれの音(旋律)の重なり方の役割やその面白さについて、自分なりの価値を記述する(B言語的表現)。	○	/	○



【図6 曲の構成を示した学習カード】

授業を通して、抽出児童A児の記述は、図7のように変化していった。初めのうちは、それぞれの音(旋律)の重なり方の特徴を「インパクト・きれい・なめらか」と記述し、そこから徐々に曲中での役割を「サビ・中間」と捉えていることが見いだせる。その後、友達と交流を図る中で自分の捉えを確信すると、「ハンバーグ/白米/おつけもの」という比喻を用いながら、ユニゾンの部分を「1番おいしい。必要なところ。」、旋律と伴奏の部分を「2番目に目立つ必要なところ。」、呼びかけとこたえの部分を「地味だけどあったほうがおいしい。あきない。」と加えている。この記述は、自分なりの価値付けの表れと捉えることができる。

鑑賞における知識の指導事項「曲想及びその変化と、音楽の構造との関わりについて理解すること」に照らすと、抽出児童A児はA評価となる。



【図7 抽出児童A児の学習カード③】

学級全体を見ると、100%の児童が、それぞれの音（旋律）の重なりが曲中で役割を担っていることに触れて記述することができた。さらに、抽出児童A児と同様に、自分なりの価値を含めて記述したA評価の児童は62.9%だった。

以上のことから、鑑賞の実践における活動と価値付けのサイクルの有効性が見いだせた。歌唱や器楽と同様、「①聴く」段階で、起点となる知識の感覚的側面が表出する。鑑賞では、弦楽器の音色という知識の情動的側面も感覚的側面への一助となった。「②見つめる・考える」段階では、音楽の縦と横との関係を軸に、部分的に聴いて確かめたり楽曲全体を通して聴いて考えたりして、知識の情動的側面を整理した。繰り返し聴く中で、起点となっていた知識の感覚的側面から派生した自分の気付きや捉え方を確信し、「③対話する」、「④表現する」を経て、その考えについてまとめていく様子が見られた。

このように、活動と価値付けのサイクルを基に、児童が音楽を多面的・多角的に見つめることで、鑑賞の実践においても知識の質を高めることができたと考察した。抽出児童A児に至っては、授業を重ねるごとに音楽を多面的・多角的に見つめる力を身に付け、最終的に楽曲に対して自分なりの価値付けをすることができた。このことから、知識の質を高めるための指導法として、活動と価値付けのサイクルの有効性が明らかになったと言える。

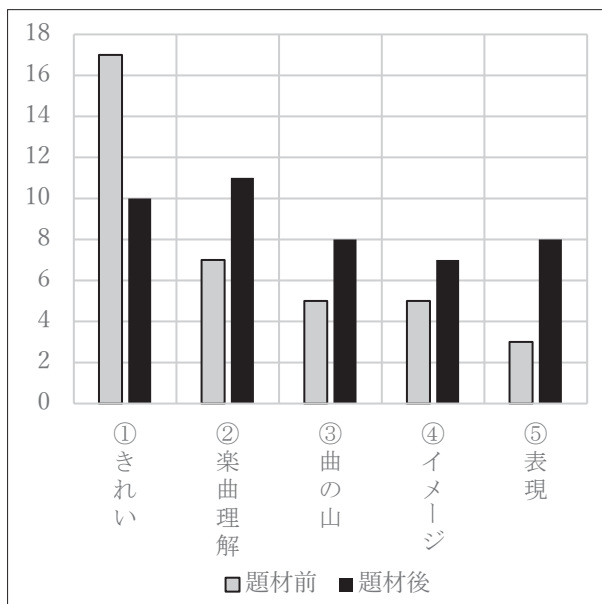
5-2 振り返りカード・アンケートからみる〈仮説2〉
—価値観を引き出す問い

<仮説2>
児童が音楽に対して自分なりの価値付けをすれば、知識の質が高まるだろう。

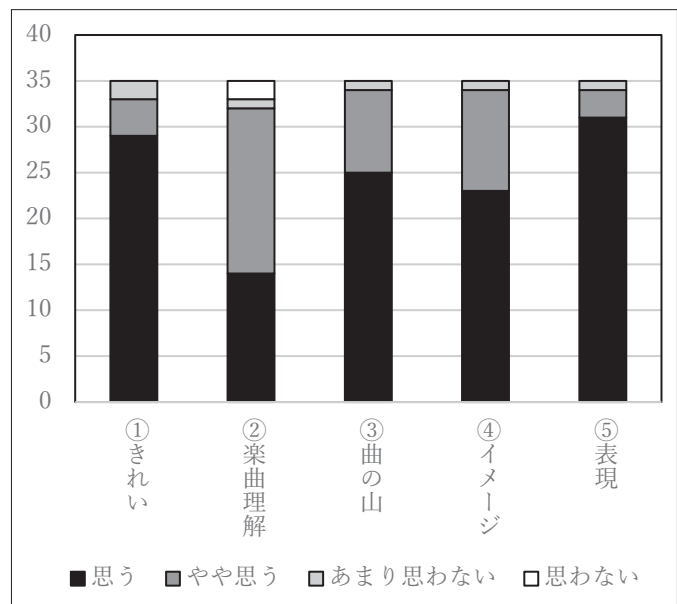
5-1で検証した通り、音楽に対する自分なりの価値付けについては、教材ごとにおいても行ってきた。しかしながら、当該の教材においてのみでなく、相対する音楽全般に対して自分なりの価値付けをできるようになることが、「汎用的知識」の観点からは望ましい。そこで、題材の前後において、「音や旋律を重ねることに、どんな意味や価値があると思いますか。」という、価値観を引き出し、かつ抽象度の高い問いかけを行った。具体的には、題材の前後に振り返りカードへの自由記述を各1回（各8分程度）、題材後にアンケートを1回実施した。

図8は、振り返りカードの自由記述を5項目に分類整理し、題材前後の捉え方の変化を表したものである。そのため複数回答となっている。図9は、題材後のアンケート結果である。先ほどの5項目について、児童は「思う／やや思う／あまり思わない／思わない」の4観点から1つ選択して回答した。

<p>【価値観を引き出す問い】 音や旋律を重ねることに、どんな意味や価値があると思いますか。</p>	<p>【回答】 ※図8で項目分けした際の基準と図9の質問項目</p> <ol style="list-style-type: none"> ①きれいな音色を生み出す。 ②楽曲理解が進み、作者の思いを知ることができる。 ③曲想を生み出し、曲の山をつくり出したり強調したりする。 ④曲想を生み出し、曲のイメージを広げやすくする。 ⑤より豊かに表現することにつながる。
---	---



【図8 自由記述を項目で分けた結果】



【図9 題材後のアンケート結果】

「①きれいな音色を生み出す。」については、感覚的側面に関する項目である。図8を見ると題材前は圧倒的に回答者が多いが、題材後は唯一回答した人数が減っている。しかし、図9では、35人中33人(94%)が「思う／やや思う」を回答していることから、音(旋律)の重なりに対して「きれい」以上の価値を見いだすことができたことにより、自由記述には表れなかったと考察した。

「②楽曲理解が進み、作者の思いを知ることができる。」については、情動的側面に関する項目である。図8から、題材後には最も回答した児童が多かったことが分かる。一方で、図9では、「思う」14人(40%)、「やや思う」18人(51%)、「あまり思わない」1人(3%)、「思わない」2人(6%)となっており、全項目の中で唯一「思わない」と回答した児童がいた。これは、音(旋律)の重なりが楽曲の中で曲想を生み出す役割を果たしていることへの理解が伴っていないと捉えられる。音(旋律)の重なりから、作者の意図を感じ取っている児童とそうでない児童との間に捉え方の乖離があるものの、多くの児童は、情動的側面からのアプローチが価値あるものだとして理解していると考察した。

「③曲想を生み出し、曲の山をつくり出したり強調したりする。」「④曲想を生み出し、曲のイメージを広げやすくする。」「⑤より豊かに表現することにつながる。」は、いずれも音楽表現に関連する項目である。図8を見ると、いずれも題材後に記述した児童が増えている。図9でも、3項目全てで100%の児童が「思う／やや思う」を回答していることから、児童が、感覚的側面や情動的側面を基に、操作的側面に発展させることへの価値を感じていると考察した。

これらのことから、価値観を引き出す問いが、音楽に自分なりの価値を見いだす動機付けになったことが分かる。特に題材前の問いは、毎時間、音(旋律)の重なりを視点に思考していく動機となった。また、価値を見いだす過程においては、まずは知識を感覚的側面から捉え、〈仮説1〉のサイクルにおける「②見つめる・考える」以降に影響を与えながら、情動的側面や操作的側面へのアプローチを経て、児童が納得感をもって価値を見いだしていく様子が見られた。

以上のことから、知識の質を高めるための指導法として、音楽に対して自分なりの価値付けをすることの有効性が明らかになったと言える。

6. 成果と今後の課題

本研究の成果としては、「知識の質を高める」ための指導法が明らかになったことが挙げられる。活動と価値付けのサイクルを様々な領域で繰り返すことで、音楽を多面的・多角的に見つめる力を身に付け、楽曲そのものだけでなく、相対する音楽全般に対しても自分なりの価値付けをすることができた。また、価値観を引き出す問いの投げかけが題材を貫く思考の動機付けとなり、児童自身がより納得感をもって価値を見いだ

していく様子につながった。

今後の課題としては、習得された知識の昇華や変容が考えられる。具体的には、自分なりの価値付けを含んだ知識がどのように表現に昇華されるのか、また、共に学ぶ他者や楽曲との相互作用によって知識がどのように変容していくのかということである。今後も知識に焦点を当てた実践を積み重ね、検証していきたい。

【謝辞】

本研究に当たっては、埼玉大学教育学部芸術講座音楽分野の森薫准教授に携わっていただきました。記して深く感謝の意を表します。

【引用文献】

- 文部科学省(2017a)『小学校学習指導要領(平成29年度告示)』.
- 文部科学省(2017b)『小学校学習指導要領(平成29年度告示)解説総則編』. 東洋館出版社.
- 文部科学省(2017c)『小学校学習指導要領(平成29年度告示)解説音楽編』. 東洋館出版社.